

I この調査について

この調査の調査項目は尊敬表現・謙譲表現・丁寧表現と、待遇表現の全分野にわたっており、一高年女性の、友人・年長女性・目上男性への表現を求めている。また位相による待遇表現状況を見る項目、多人数場面での待遇表現を求めた項目もあって、ここに待遇表現の立体的な姿が写し出されるように配慮されている。

調査報告は、北海道から沖縄までの34地点では、調査者が現地で高年女性に面接して教示を受けたものの記録とその総括（まとめ）である。ただし四国の2地点と島根県の1地では、諸事情のため、話者は男性となっている。話者の年齢は70歳代が一般であるが、80歳以上が4名、69歳から59歳までの方が5名おられる。なお、海外3地の報告は、日本在住の調査者が自身の待遇表現を内省して記述したものである。

この調査は1996年9月から1997年11月の間におこなわれている。

II 本資料について

すでに述べたように、この調査はその地点のはえぬきの一高年女性の待遇表現を記述したものである。その個人は当然その地点の言語状況を見せているのであるが、それぞれの地点は地域差ばかりでなく、それぞれの歴史を負っている。たとえば琵琶湖の湖北、木之本町の調査者は、仏教的雰囲気が生話の上にも感じられることを指摘している。各個人の言語は、特にその待遇表現は、それぞれの家庭環境、学歴、職業歴などに影響されるところが大きい。地域共通語、全国共通語の受容状況にもかなりの個人差がある。すなわち34地点の資料の比較には慎重を期したい。

さて以下の記述中に資料をあげる時、その資料のアクセント表記は省略した。また地点名は、市の場合は市名のみを記し、町・村の場合は県名と町村名を記して郡名は省略している。

III 資料を読む

1. 対者待遇の待遇表現差

この調査では、高年の女性が、A. 同性の親しい友人、B. 近所の年長の女性、C. 目上の男性、この三者を待遇する表現を聞いている。対者待遇ではA/B/Cの3段階待遇

がもっとも多いが、A/B・C また A・B/C の2段階待遇のもの、またA・B・Cが同一待遇のものもある。

① A/B/C待遇

イグ カー/イグ カエー/イグ カネー ((3)行くか 新潟県四ツ郷屋)

文末詞が待遇表現差を担っている。

イク カー/イキナハル カイナー/イキネンス カ ((3)行くか 大野市)

Aには敬語要素がない。B・Cはともに方言敬語であるが、その待遇度が異なっている。

イグ スカ/イギヤンス カ/オデンス カ ((3)行くか 盛岡市)

AとBでは丁寧助動詞が異なっており、Cは尊敬動詞を用いている。

イクー/オイデマス カ/イラッシャイマス カ ((3)行くか 萩市)

Aは敬語要素なし、Bは方言敬語、Cは共通語敬語で待遇している。C段階を共通語敬語で言う地点は多い。

このように、3段階の内部はさまざまである。

② A/B・C待遇

ゲンキ カヤ/ゲンキ ゲー・ゲンキ ゲー ((1)元気かね 館林市)

AとB・Cとは文末詞が異なる。

オル カエ/オインデル カノーシ・オインデル カノーシ ((2)家にいるか 中村市)

Aは普通動詞、B・Cは方言尊敬動詞、また文末詞もAとB・Cとは異なる。

ゲンキ カネ/オゲンキデス カ・オゲンキデス カ ((1)元気かね 徳山市)

Aは敬語要素なし、B・Cは共通語敬語である。

イカレル ケ/イカッサル カイシ・イカッサル カイシ ((3)行くか 富山県五箇山)

Aは新形式の敬語(町の敬語?)、B・Cは伝統的な敬語である。

③ A・B/C待遇

ソゲ カネ・ソゲ カネ/ソーデゴザイマス カ ((34)相手の意見にうなづくことば 松江市)

A・Bは普通体、Cは丁寧体である。

イッテ カ・イッテ カ/イカハリマス カ ((3)行くか 京都府和知町)

A・Bは軽い方言敬語、Cはかなり高い方言敬語である。

A・B/CタイプのはA/B・Cタイプのものより少ない。

④ A・B・C待遇

イク ゲー・イク ゲー・イク ゲー ((3)行くか 栃木県氏家町)

ユートイテ ツカ・ユートイテ ツカ・ユートイテ ツカ ((26)夫への伝言を頼む 香川県綾歌町)

A・B・Cが同一表現形式であるものは最も少ない。

ところで調査項目39では、1. 寺の住職、2. 校長先生、3. 4. 見知らぬ年配の男女、

5. 6. 顔見知りの年上の男・女、7. 8. 10歳ほど年下の見知らぬ男女、9. 10. 同級生の男女、11. 12. 10歳ほど年下の顔見知りの男女、13. 14. 近所の男子中学生、女子中学生への、朝の出会いのあいさつ、を聞いている。諸地の表現の具体相は、それぞれの報告の中でご覧いただきたい。この調査のまとめとして、たとえば萩市の調査者は、「待遇表現は上・下、親・疎の関係把握によってなされており、「上」の認識は相手の社会的地位にも因るが、年齢もその重要な要素である」と言う。また、どちらが先に声をかけるかは上・下のわきまえであり、「どこへ行くのか」相当のことばを口にするかしないかを分けるのは親疎の認識であると説明している。男女差は特に認識されていないが、同年配の男女では、同性である女性のほうにより親近感のあるあいさつをしている。なお、小松市の調査者はこの調査とは別に、①近所の知り合い、②仲のよい友人、③近所の年長者、④土地の目上の人、⑤初対面の観光客に、「どこに行くのか」と聞く表現を報告している。

2. 第三者待遇の待遇表現

項目(11)から(20)は第三者待遇表現の報告である。いわゆる無敬語地域、あるいは無敬語話者も、対者待遇では文末詞によって親愛や尊敬の待遇を見せていた。第三者待遇では文末詞を言わないので尊敬・親愛の待遇が見られない。この調査では、北海道当別町、宮城県利府町、茨城県岩間町、栃木県氏家町、群馬県館林市の話者、また新潟県四ツ郷屋、長崎市手熊町の話者が無敬語待遇であった。また和歌山市、香川県綾歌町の話者も、項目によっては無敬語待遇を見せている。第三者待遇に尊敬表現を見せる地点は多いが、年長者待遇と目上待遇の差はほとんど見られない。なお、近畿の諸地、山口市・萩市の話者は、第三者である友人も軽い敬語で待遇している。

第三者待遇では謙譲語は出にくく、「(20) (年長者・目上の人物から)もらった」の場合、「チョーダイシタ」は3地から、「イタダイタ」は7地から報告されたにすぎない。鹿児島県与論町の[tabe:tan]は「賜る」であろう。なお、項目(13) (19)では年長の対者に別の年長者・目上の人物のことを語っているのであるが、～デス・～マス体の表現が少ないのは意外であった。

3. 待遇表現法のさまざま

3-1 文末詞による待遇

文末詞による待遇表現の仕分けが顕著であることは、ほとんどの調査者が言及しており、その具体例を示している。ここにそのいちいちを挙げることは省略する。ことに新潟県四ツ郷屋の調査者、また長崎市手熊町の調査者は、その地の待遇法は述部に依拠することがまずなく、文末詞に依拠した待遇表現であると言う。また宮城県利府町の調査者が「当該

方言では、全般に、上下関係を表すいわゆる敬語表現形式は榮えず、むしろ親しみや丁寧さを表す表現形式によって相手を待遇するということの方に、より大きな注意が向けられていると見られる」と述べているのも、文末詞に依拠することの大きいことを言っていると思われる。

3-2 呼称詞による待遇

A 対称詞

調査項目(1)で、A. 親しい友人、B. 近所の年長の女性、C. 土地の目上の男性に呼びかける対称詞が求められている。全国34地点で得られた対称詞は次のようであった。

a 親しい友人を呼ぶ呼称

ウナー(長崎市)・ワレ(小松市)・ナー(新潟県四ツ郷屋)・オマー・オマハン・アントなど、さまざまな対称代名詞で呼びかける。茨城県岩間町の話者は、どの段階の対者にも「〇〇サン」と呼びかけ、人称代名詞は用いないと言っている。また北海道当別町の話者は、どの段階の相手にも「アラー」と感動詞を言うばかりだと説明している。

b 近所の年長の女性を呼ぶ呼称

対称代名詞の呼びかけ、「オバサン」「オーバーチャン」など、見なし親族称の呼びかけ、また資格称「奥サン」の呼びかけなど、さまざまである。大阪市・天理市の話者は「呼びかけ語を言わない」と答えている。

c 目上の男性への呼びかけ

「センセー」(先生)、「オジューサン」(お住職さん)のように資格称で呼ぶ所が多いが、このレベルでも人称詞で呼ぶ所もある。たとえば「オマエ」(小松市、長崎市)、「オマエサン」(新潟県四ツ郷屋)、「オマイサマ」(富山県五箇山)がある。「お前」の本来の敬意がなお保有されているのである。また「アタ」(宇土市)、「アナタ」(山口市)、「アントサマ」(名古屋市)があり、「オタク」(館林市、京都府和知町)がある。

d まとめ

以上のように3層の対称が求められているが、A/B/Cと3段階で答えられているのが18地点でもっとも多く、A/B・Cが10地点、A・B/Cが3地点、A・B・Cと1段階の所は3地点であった。与論町は?uro:(お前は)、?ure:ja、?ure:ja(あなたは)の2段階、沖縄の伊江村は「らー」(お前は)、「ウガー」(あなたは)、「ウマー」(あなたは)の3段階である。

B 自称詞

調査項目(21)で、3層の対者に「私も元気だよ」と言う時の「私」を聞いている。得られた答えを表示すると次のとおりである。(表は次頁に記す)

C 対称詞と自称詞の使用状況の比較

次の表に見えているように、対称詞の場合は、A/B/Cのように、対者に応じて人称詞

	A. 友人に	B. 近所の年 長女性に	C. 土地の目上 の人に	地点数	地点数 合計
A・B・C	ワタシ オレ ウラ ウチ ワン	ワタシ オレ ウラ ウチ ワン	ワタシ オレ ウラ ウチ ワン	1 5 3 1 1 2	2 2
A/B・C	ワテ オラ ワシ ウチ ワタシ ワタシ	ワタシ ワダス ワタシ ワタシ ウチ 「私」相当	ワタシ ワダス ワタシ ワタシ ウチ のことばなし	2 1 1 2 1 1	8
A・B/C	オラ ウチ	オラ ウチ	ワダシ ワタシ	1 1	2
A/B/C	ウチ	ワタシ	ワタクシ	2	2

を使い分けることが顕著であるが、自称詞では三者に同じ人称詞で言うことが多い。つまり対称詞は対者待遇表現にかかわることが顕著であり、自称詞は対者待遇表現にかかわることがさして著しくないと見えよう。自称詞は謙讓表現にかかわるものであるが、これの言い分けが著しくないことは、謙讓表現を人称詞に託すことがさして発達していないことを示すものであろうか。

3-3 言いまわしによる待遇

A 受惠表現・相手本位の表現

鈴鹿市の調査者は、「こちらから頼んだのでもないのに、あえて頼ん

だ結果の恩恵であるかのように言いなす表現、相手の存在や行為そのものがこちらには恩

人 称 詞 の 使 い 分 け		自称	対称
A/B/C	友人・年長者・目上にレベルの異なる人称詞を用いる。	2	1 8
A/B・C	年長者と目上には同じ人称詞を用い、友人には異なる人称詞を用いる	8	1 0
A・B/C	友人と年長者に同じ人称詞を、目上には異なる人称詞を用いる。	2	3
A・B・C	友人・年長者・目上に同じ人称詞を用いる	2 2	3

恵であると言いなす表現、要するに受惠の表現が一注目事象である」と言い、多くの文例をあげている。たとえば、「15. 家に来ている」を、「キテモロテマス」と言う類である。兵庫県新宮町では「3. 行くか」を目上の人物には「オツレニシテ モラエマス カー」と言っている。この種の表現は近畿・北陸で多く聞かれるが、岡山県新見市でも「24. 待たせたね」を「マッテモロータ ナー」（友人に）、「ヒーサマッテ モライマシテ ナー」（目上に）と言っている。受惠表現は、相手本位の表現であり、謙譲表現である。

項目35は、道を聞かれた時の教え方に「その角をマガッテモラッテ」の言い方があるかと問うている。これには近畿の諸地のほかに大野市、名古屋市、香川県綾歌町から、この表現が報告されている。

B 婉曲表現

新見市では目上の人物に「1. 元気かね」と聞くのに「○○サン、ゲンキニ ショーッテナラ ヨロシーガ」と言っている。「ショーッテナラ」という表現は臆化であり、婉曲表現である。また関東・東北の諸地では、文末を言い切らず、「～ケド」「～ケドモ」「～カラ」「～ガラ」で終えることが多い。これについて宮城県利府町の調査者は「言い切りの表現を避け、文末を曖昧にぼかすことで、当人の表現意図や主張を和らげる機能を果たす。一種のへりくだり、謙譲表現」と説明している。

C 謙退・わびの前置き表現

「27. これをあげよう」と目上の人に言うのに、滋賀県木之本町では「チョット コレ スイマセーン。ソマツデスケド ツカッテ モラエマセン カ」と言っている。また兵庫県滝野町では「ツマラナイ モノデスケド コレ ドーゾ」と言い、佐賀県基山町では「ソマツナ モンデスケド ドーデス カ」と言っている。また「26. 年長者や目上の人に夫への伝言を頼む」ことばでは、「スマンケド」の前置きわびことばが諸地に見え、兵庫県新宮町では「トシヨリ ツコテ ゴメン ナ。ワルイケド …」の前置きことばを言っている。これらも謙譲の一表現である。

3-4 音声による待遇表現

記録資料の上では音声による待遇表現を十分に見ることはできないが、これは当然、推測されることである。宮城県利府町の調査者は「ことばの伸ばし縮め、抑揚によって、語気を和らげたり逆に強調したりする」と述べて、文末長呼形の文例、また文末イントネーション（上昇調、下降調）の文例をあげている。

3-5 動詞・助動詞による待遇表現

A 尊敬動詞

「2. 居る」「3. 行く」「15. 来る」の尊敬動詞として、オイデル・オイデマスが諸地に見える。盛岡市はオデル・オデンスである。ミエルも諸地にあり、ゴザルは小松市・富山県五箇山・名古屋市・滋賀県木之本町、鈴鹿市にある。これらはキテオイデル、イッテミエタ、キテゴザルのように補助動詞としても用いられている。

「7. 寝る」の尊敬語オヨルが盛岡市と萩市に見えていて、萩市では古老のことばと説明されている。「9. 食べる」ではアガル（アガル）・オアガル（オアガル）が諸地にある。

「19. くださった」「18. 見せてくださった」はオクナシタ（鈴鹿市）・オクンネシタ（大野市）・オグレットクナハリアンシタ（盛岡市）・クダサッタ（諸地）・クリッシャッタ・ガッシャッタ（小松市）・クランシエタン（沖縄県伊江村）・ツカサエエタ（萩市古老）・ヤンナハッタ（宇土市）があり、与論島はtabe:tan（たまわる）である。大野市の話者は「オクサンガ チョーダッタ」（奥さんがくださった）と語っているが、「頂戴る」は尊敬語としても用いられているのであろうか。

「6. 見ましたか」の尊敬語は盛岡市では「オミレッタス カ」「オミレンシタ ガ」であるが、これは「オ+動詞」であろうか。盛岡市では「9. 食べてください」には「オタベツテクナンシエ」「オアゲツテクナンシエ」と言っている。

「5. する」「6. 見る」「13. 言う」の尊敬語は共通語的で、方言色の濃いものは見られない。

B 尊敬助動詞

a. ～レル・～ラレル

「イカレル ケ」（富山県五箇山）、「ゲンキニ ショーラレル ンカナ」（新見市）のレルは方言敬語助動詞であろう。「イカレマス カ」（松江市）のレルは共通語敬語であろうか。「7. ネラレ」「9. タベラレ」（富山県五箇山）、「タベテミラレ」（富山市）のように、レル・ラレルの命令形が富山県に見えている。

b. ～シャル・～サッシャルなど

「行カッシャル」「見サッシャル」が小松市にあり、富山県五箇山は「行カッサル」「見ヤッサル」である。名古屋市の「オラッセル」（いられる）も～シャル敬語であろう。宇土市の「行きよらシた」（行っておられた）はごく軽い敬意を表現したもので、この～ス・～ラス敬語は～シャル・～サッシャル敬語の簡素なものである。小松市の「行くマッシャル」は「行きまいらせられる」であろう。敬意は高い。

c. ～ンス

滋賀県木之本町の「行カンス カ」「行カーンセン カ」の敬意は軽い。

d. ～ナサル・～ナサイマス

ナサル（佐賀県基山町など）・ナハル（諸地）・ンサル（島根県桜江町・新見市）・ハル（近畿）・サイタ（なされたー徳山市）、ナサイマス（佐賀県基山市）・サンス（盛岡市）・ナス（鈴鹿市）・ネンス・ネース・ネス（大野市）と、～ナサル・～ナサイマスことばは多様である。

e. ～ヤス

滋賀県木之本町に「アガットクレヤス」（食べてください）、ミシェートクレヤス（見せてください）がある。名古屋市の「ネヤーシタ カナモ」（やすまれましたか）も「～ヤス」敬語であろうか。

f. オ～アンス（やんす）

盛岡市に「オデッテアンス」（来ていらっしやる）、「オグレットクナハリアンシタ」（くださった）がある。ここでは「～アンス」は丁寧助動詞として用いられていることも多いが、この場合の「オ…～アンス」は尊敬表現である。

C 謙讓動詞

本調査での謙讓動詞の調査語は「20. いただいた」「22. 食べました」「23. (その荷物を) 持ちましょう」「24. お待たせしました」「25. 待っています」「27. あげましょう」である。これらの中で方言謙讓語と思えるものは、「いただいた」相当の [tabe:tan]（与論島）、「クララタン」「クララリンシェタン」（沖縄県伊江村）と、「あげましょう」相当の「ウシャギユン」（沖縄県伊江村）、「マショツ」（富山県五箇山）であった。筆者は昭和40年代に萩市の農村で「マセル」（あげる）を高年者から聞いているが、今回の調査では提示しても聞くことができなかった。これらのほかは、「ヨバレタ」「イタダイタ」（ご馳走になった）、「モッタゲンショ」（持ってあげましょう）（大野市）、「オマタセシテ ゴブレシマシタ」（萩市）、「オアゲシマッショー」（佐賀県基山町）の類で、共通語的発想のものである。先に述べたように、謙讓表現は受惠表現、婉曲表現などに頼るところが大きい。

D 相手の恩恵を請う謙讓の補助動詞

相手の恩恵を請う謙讓動詞の補助的用法のもの、すなわち「～てください」相当のものが「9. どうぞ食べてください」、「10. 見せてくださいませんか」、「26. 伝えてください」、「7C. 寝てください（看護婦さんのことば）」に見えていて、以下のようにさまざまである。

クダサイ（諸地）・クダサリ（富山県五箇山）・クダサレ（新潟県四ツ郷屋）・クナンシェ（盛岡市）・ケサエン（宮城県利府町）・クリッシェン デ（小松市）・ガッシェンデ（小松市）・ガッシュョ（小松市）

クンナサイ（新潟県四ツ郷屋）・クンナハレー（長崎市）・クンナレー（長崎市）・ク

レハラシマセン カ (大阪市) ・クレテデッシャロ カ (兵庫県滝野町)

オクレー (新見市・萩市) ・オゴレ (栃木県氏家町) ・オゴレットクナンシエ (盛岡市) ・(ユートイ) トクレー (京都府和知町) ・(ユートイ) トクネヘン ノ (大野市) ・(タベ) トクナハレ (鈴鹿市)

ツカサンセー (萩市) ・ツカ (香川県綾歌町)

イタ (和歌山市・香川県綾歌町) ・イターカシテ (和歌山市) ・イタダケマセンデスマ
ロ カ (鈴鹿市) ・イタダケマスマー カ (萩市)

チョーダイ (名古屋市・鈴鹿市)

ハイヨ (拝領) (宇土市)

ゴシナハイ (松江市)

モラエマス カ (大阪市) ・モラワレンデショー カ (佐賀県基山町) ・モラエンデシ
ョー カ (新見市)

taba:ri (給わり) (与論町)

E 丁寧助動詞

ゴザイマス (諸地) ・ゴザンス (新見市) ・ゴイス (勝山市) ・オマス (大阪市) ・ア
リマス (萩市) ・ヤンス・アンス (盛岡市) ・マス (諸地) ・デス (諸地) ・ドス (滋賀
県木之本町) ・ダス (盛岡市) ・ス (盛岡市・宮城県利府町)

これらのほかに与論島には「はべる」もあるようで、調査者は [pi:sajabju] は「寒さはべる」に相当するかと述べており、「よかったですねえ」は [jukati ?e:bjui] である。

「マス」の異色の用法として松本市の「タベマシヨ」(食べてくれ)がある。友人に言う「～マシヨ」は丁寧な命令形である。

「デス」は共通語助動詞であるが、宇土市では「行クデス」「ヨカデス(いいです)」、「オンナハッデス カ(おりなさいますか)」のように、用言にも「デス」を添えて、その用法に特色を見せている。

なお、小松市の調査者は「当該方言の特徴的なものに“です”“ます”相当のワンデがある」と説明している。すなわち文末詞が丁寧助動詞相当の働きをしているのである。

3-6 「動詞連用形+テ+(指定の助動詞)」の尊敬表現法

これはごく軽い敬意を表現するもので、この資料集では、京都府・兵庫県・岡山県・山口県の諸地に見えている。

①オッテヤ (兵庫県滝野町・新見市) は断定表現である。

②オッチャー ナカッタ (山口市・徳山市・萩市) はオッテジャナカッタの縮約形で否定表現である。

③オッテジャロー (新見市・山口市・萩市) は推量表現である。

④ミテデアリマシタ カ（御覧になりましたか）（萩市）、イッキョッテンデッカ（行かれてるのですか）（兵庫県滝野町）、ミテジャッタ カナ（新見市）、ミチャッタ カナ（京都府和知町）、ミタッタ カー（兵庫県新宮町）は問いかけ表現である。「～チャッタ」「～タッタ」は「テジャッタ」の縮約形で、滝野町では「～タッタ」は言うが「～チャッタ」は言わない。一方、山口県では「～チャッタ」を言って「～タッタ」は言わない。

以上は指定の助動詞を見せている表現であるが、「オツテナカッタ」（兵庫県滝野町）・「イキョーテン」（今、行っておられるの？）＜進行＞（新見市）・「オツテ カネー」（徳山市）などには指定の助動詞は見えない。

3-7 身内敬語

項目29は、「ご主人はもう帰っているか」の問いに「帰っている」と答える文表現を求めている。「モートツテヤ」（京都府和知町）、「モドツテゴザル」（小松市）、「カエツテオイデル」（富山県五箇山）のように尊敬待遇で答えているのは近畿・北陸である。ただしこの地域にも身内敬語の報告のない地点が相半ばしてある。また中国地方の萩市の報告には「今回の調査では身内敬語は聞かれなかったが、過去（昭和48年）の調査では『ウチニヤーン カエツチョツテデス』（主人は帰っておられます）のように身内敬語を聞いている」とある。また与論島の報告者は「第三者に対する妻から夫への敬語、子どもから父への敬語は依然として残存している」と述べている。

一方、項目28「孫に洋服を買ってやった」では、北海道当別町の報告に、年長者や目上と言う時に「アゲタ」が見えている。これは今日的な美化語的使用で、身内敬語とは思えない。その他の地点は与論島が[turatʃan]、沖縄の伊江島は「トウラチャン」「ムタチャン」、宮城県利府町は「ケダ」、新潟県四ツ郷屋、長崎市手熊町は「クレタ」、その他の地点は「ヤッタ」である。

『言葉に関する問答集－敬語編(2)－』（文化庁、平成8年）には、身内尊敬用法が方言の敬語法として、関西だけでなく西は九州・沖縄まで、東は新潟・長野・愛知・岐阜までの広い範囲に分布しているとある。本調査は、今日、身内敬語表現が衰退途上にあることを見せている。鈴鹿市の報告者は「夫のことを語るのに敬語を使ってはおかしいという意識がある」と報告している。身内敬語表現の衰退は、敬語表現の共通語化の一現象であろう。

3-8 進行の敬態と存続の敬態

項目8、14、15、16は「行く」「来る」「する」について、進行敬態あるいは存続敬態を求めている。答えられた表現の多くは、アスペクト形式部分を尊敬表現に仕立てている。たとえば「イッキョッテンデッカ」（兵庫県滝野町）、「イキョンナサッタ」（佐賀県基

山町)、「シオイデル」(萩市)、「キテハリマス」(大阪市)、「イッテオイナル」(鈴鹿市)、「キテゴザル」(小松市、富山県五箇山、名古屋市)、「キテオイデー ヨ」(松江市)、「シテミエル」(鈴鹿市)などがそれである。一方、「行く」「来る」の場合は「オイデヨル カ」(中村市)、「オイデトリマス」(香川県綾歌町)、「オイデチャール」(和歌山市)、「ミエトンデス」(兵庫県新宮町)のように、動詞を尊敬語にして言うこともある。「オイデヨンナサツデス カ」(佐賀県基山町)、「オデツテアンスオンヤ」(盛岡市)は動詞もアスペクトを担う部分もともに尊敬仕立てとなっている。

ところで調査項目8「どこに行っているか」「どこに行っていますか」は進行態として提示されているが、共通語文としては存続態と見るべきもので、進行態を求めるには他の動詞を選ぶべきであった。もっとも近畿の一部(京都府和知町、兵庫県滝野町・新宮町)・中国・四国・九州では「行っている」を不安なく進行態と理解して、進行態文を示している。富山県五箇山の「ドコニ イットラレル ケ」などは存続態であろう。また「イカハリマス カ」のようにアスペクト形式を持たない文が主として近畿以东の13地点で答えられている。「どこに行っているか」を進行態とは受けとれないためであろう。また萩市の話者は相手の行動を問うには「イキヨツテ ホカネ」は言えないが、第三者の行動を話題にした場合は言えるという。注目すべき説明であろうか。具体的状況は萩市の報告をご覧ください。

項目14「今そこに行っていた」も、存続態ととるべきで、「今」はすぐわない。これの33地点の文に存続態と進行態とがあるのは、提示した共通語文の不備であることをおわび申しあげる。

4. おわりに

自画自賛と恐縮しながらも、調査地点国内34地点、外国3地点の、39項目にわたる待遇表現現況のこの報告集は貴重な資料集であると言いたい。調査者のことばの中にも「待遇表現に共通語の影響が顕著になりつつある現在、この調査結果は貴重な資料となろう」(盛岡市)とある。

共通語敬語の受容、方言敬語の衰退の状況はこの資料集中にもたしかに見られるが、とはいえ、全国的にはなお豊かな方言敬語状況がここに明らかである。外国3地点の方言状況も興味深く拝読したが、筆者の力不足のためここに取り上げることができなかった。深くおわび申しあげる。

追記 調査項目(7)Cでは、看護婦さんの「そのベッドに寝てください」の表現を求めている。今日、北部九州では、「ヤスマレテ クダサイ」の言いかたがさかんであるが、この34地点の調査では、萩市で「若い看護婦さんが言う」と答えられているだけである。